

ピアサポートルームの活動に参加した 大学生ピアサポーターの体験に関する探索的研究

黄 正国^{1, 2)}, 石田 貴洋²⁾, 三浦 寿秀²⁾
城 英介²⁾, 磯部 典子¹⁾, 二本松美里¹⁾
岡本 百合¹⁾, 三宅 典恵¹⁾, 永澤 一恵¹⁾
矢式 寿子¹⁾, 池田 龍也¹⁾, 日山 亨¹⁾
杉原美由紀¹⁾, 吉原 正治¹⁾

キーワード：ピアサポート，大学生，活動評価

Experience of peer supporters in peer support activities for university students

Zhengguo HUANG^{1, 2)}, Takahiro ISHIDA²⁾, Toshihide MIURA²⁾
Eisuke JO²⁾, Noriko ISOBE¹⁾, Misato NIHONMATSU¹⁾
Yuri OKAMOTO¹⁾, Yoshie MIYAKE¹⁾, Ichie NAGASAWA¹⁾
Hisako YASHIKI¹⁾, Tatsuya IKEDA¹⁾, Toru HIYAMA¹⁾
Miyuki SUGIHARA¹⁾, Masaharu YOSHIHARA¹⁾

Key words: peer support, college students, evaluation

I. はじめに

社会文化の変容とグローバル化の進展に伴って、大学生の個性が尊重されるようになってきた。多様な大学生のニーズに対応するために、組織的に学生支援・学生相談を充実させていくことが求められるようになってきている。一方で予算軽減により担当部署の人員配置が困難になり、限られた学内資源の中で、いかに効率的に学生支援・学生相談を行っていかかが課題となっている。その中で、同じ立場と境遇を共有している大学生同士の自発的な相互扶助が学生生活を送る上で重要な

資源であることが注目されて、多くの日本の大学においてピアサポート活動 (Peer Support Activity) が実施されるようになってきた¹⁾。大学におけるピアサポート活動は、欧米で発祥し、海外では推奨・促進すべき学生支援活動として位置づけられている²⁾。わが国では、2000年前後にはじめて導入され、国立大学を中心に普及してきた。現在、国立大学の83.5%、公立大学の34.9%、私立大学の46.4%でピアサポート活動が実施されており、その中で98.7%の大学がピアサポート活動の取り組みについて肯定的な意見を示している³⁾。

1) 広島大学保健管理センター
2) 広島大学ピアサポートルーム

1) Health Service Center, Hiroshima University
2) Peer Support Room, Hiroshima University

今回の調査を行ったA大学では、2000年6月に「学生による学生のための何でも相談室」としてピアサポートルーム（以下、PSR）が設置され、研修を受けた大学生がピアサポーター（以下、PS）として同大学の学生を対象に相談支援を行ってきた⁴⁾。当初は郊外型キャンパスを取り巻く社会文化的環境における学生の孤立を防止することを目指す活動として開始されたが、徐々に学内で広く認識されるようになって、学生支援を担う公的相談窓口として定着してきた。安全かつ効果的な活動を行うために、PSになりたい学生に対して、傾聴を中心とした対人援助技法の研修を行った。さらに対人支援の業務経験のある教員が専門アドバイザーとしてPSRの活動と運営に関わるようになった。最初の数年間は個別相談の件数が伸び悩んでいたが、新入生相談コーナーを設けたり、もっと気軽に話ができる場として「おしゃべり茶話会」などの活動を企画したりして、アウトリーチ活動を積極的に実施してきた。さらに、中高年の社会人学生や、他大学出身の大学院生、編入生、コミュニケーションを苦手とする学生などの特定の集団を対象に、特徴とニーズに応じた学内オープン型のグループ交流活動を実施してきた。現在、個別相談が増えてきた。また、単発な相談だけではなく、継続的な相談を希望する学生もいるため、メンタリング（相談者1人に対し2名のPSが週1回の頻度で行う継続相談）を実施するようになった。

PSを対象に行った先行研究では、「ピアサポート活動に参加したことで、能動的な態度やコミュニケーションスキルが高くなった」というPSの成長について報告されている⁵⁾。一方で、「参加が一部の学生にとどまっている」、「ピアサポーターへの負担が大きい」などの意見が挙げられた。また、「活動に参加する大学生の確保が困難」などの課題も浮き彫りになっている⁶⁾。「学生同士が気軽に相談し、互いに助け合う」というピアサポートの精神に基づいて、安全かつ効果的に活動を展開していくために、PSの参加体験を整理し、PSへの支援体制を強化していくことが喫緊な課題である。本研究は、過去一年間の活動を振

り返り、PSはどのような体験を得ているのか、それら体験をどのように評価しているのかについて明らかにすることを目的にした。

II. 方法

1. 調査対象者

A大学のピアサポートルームの活動に参加しているピアサポーター15名（活動経験1年目は4名、2年目6名、3年以上5名）であった（A大学の現役ピアサポーターは合計53名で、調査対象となったのは28.3%であった）。

2. 調査方法

本研究は、5年前に行った先行研究⁷⁾を踏襲して、フォーカスグループインタビュー法を用いて質的データを収集した。

(1) フォーカスグループインタビューによるデータ収集

2017年2月にフォーカスグループインタビューを行った。PSRの専門アドバイザーを務める臨床心理士が進行と記録係りを担当した。調査対象者の承諾を得た上で発言を記録した。

(2) 活動の評価方法

先行研究⁸⁾で開発されたEmpowerment Evaluationの評価方法を用いた。手順は以下で示した通りである。①PSRのミッションを再確認した上で、調査対象者全員で過去一年間の活動を振り返り、行った活動内容をリストアップした。②リストアップされた個々の活動内容を整理しカテゴリ化した。③カテゴリ化された活動内容について、PSA全体の目的やミッションにおいて重要であるかを参加者個々で評価した。その際、与えられた5ポイントの持ち点を各活動内容カテゴリに付与するように説明した（一つの活動内容カテゴリに付き1～5ポイントを付与することができるが、ただし、合計5ポイントまでとする）。付与されたポイントの合計に基づいて各カテゴリの重要度を評価した。④調査対象者全員でそのように評価した理由について話し合った。⑤活動内容の各カテゴリの達成度について、10段階評価（最も低い評価点1から最も高い評価点

10までのスケール)で行った。⑥達成度評価の結果について全員で共有し、なぜそのように評価したのかについて話し合った。最後に、活動の目的やミッションについての考えを再確認し、今後の活動の改善点を検討した。

3. 分析方法

活動内容をリストアップし、全員でキーワードを抽出してラベル化を行い、カテゴリー化した。また、重要度評価と達成度評価を量的尺度で評価し、評価理由については記録し、カテゴリーにまとめた。

4. 倫理的配慮

調査への協力依頼についてメール文書で行い、「プライバシーが侵害されることはない。回答及び不回答による不利益はない」について明記し、参加同意もメール書面で調査対象者の承諾を得た。

Ⅲ. 結果

1. PSR 過去一年間の活動実態

調査対象者が過去1年間の活動内容をリストアップした結果、11のカテゴリーに分けられた(表1)。それらは、「相談活動」、「研修活動」、「交流支援」、「外部向けセミナー」、「美化活動」、「広報活動」、「運営企画」、「組織業務」、「内部交流」、「資料作成」、「渉外活動」であった。

2. 活動内容のカテゴリーの重要度評価

PSRの活動目的において、重視されてきた活動カテゴリーは以下の4つであった。本来設置された目的であった「相談活動」、対人援助的傾聴技法を磨く「研修活動」、相談支援の利用を促す「広報活動」、様々な活動を円滑に実施するための「運営企画」であった。それに対して、コミュニケーションが苦手な学生を対象に行った「外部向けセミナー」や、花など植物を世話する「美化活動」や、情報や知恵を蓄積していくための「資料作成」について、重要度の評価が低い結果になった(表1)。

「相談活動」が重要だと評価された理由につい

て、「相談活動はPSRの存在意義を果たしているからだ」、「相談活動を行うことで、PSの活動へのモチベーションが保たれる」、「PSRの一番の原点だと思う」などの発言があった。その次、「研修活動」の重要度が高く評価された理由として、「PSRはちゃんと学生の話聴くというのが売りなので、研修をすることが活動を維持する上で大切だと思う」、「相談を受けた学生が満足するためにはPSがきちんとトレーニングを受けないといけない」、「PS自身が相談を受けることに不安を持っているため、研修を受けることで軽減することができる」などの発言があった。さらに、「広報活動」が重要だと評価した理由について、「PSRがどんなことをしている所なのかがわかってもらって、相談に来やすくなる」、「広報しなければPSRを必要としている学生に気付いてもらえない」、「PSRの目的である相談や、そのための研修を広く知ってもらうために重要」という発言があった。最後に、「運営企画」の重要度が高く評価された理由について、「活動の基礎の部分であり、いろいろな会議があって、遭遇した問題について話し合って改善していくことができる」、「全体会や部会で民主的な話し合いができて、その結果を活動に反映させ、PSRの地盤を作っている」、「自分の意見を言ったり、複数で話し合ったりする機会が与えられているので、人として成長できる」などの発言があった。なお、「外部向けセミナー」、「美化活動」、「資料作成」などのカテゴリーの重要度評価が低かったのは、「これらの活動は全員参加ではなく、一部のPSのみ参加した」という理由が挙げられた。

3. PSR 活動の達成度についての評価

各活動カテゴリーそれぞれについて、調査対象者に達成度を個別に評価させた。達成度が高かったのは、「内部交流」、「組織業務」、「渉外活動」、「研修活動」、「運営企画」、「広報活動」、「相談活動」の順であった(表2)。

「内部交流」の達成度評価が最も高く評価された理由として、「息抜きの場として内部交流の機会があって良かった」、「いろいろな交流の機会

表1 活動内容のカテゴリー分類と重要度評価

カテゴリー	活動内容	重要度 評価
相談活動	・4月仮設 ・おしゃべり茶話会 ・メンタリング ・個別相談 ・進路相談イベント	24
研修活動	・直前セミナー ・前期養成セミナー ・夏合宿研修 ・後期セミナー(実践編) ・ロールプレイ研修会 ・セミナーの補講 ・シフトでのロールプレイ ・ロールプレイ ・シートの作成 ・個別ロールプレイ	18
広報活動	・授業訪問 ・授業中の宣伝 ・Facebookによる広報 ・HP更新 ・構内案内板 ・電子掲示板の掲示 ・パンフレット作成 ・ポスター作成 ・新入生ガイダンス ・広報カード作成および修正	12
運営企画	・全体会 ・前期の振り返り ・全体会グループワーク ・代表者会 ・部会 ・新人PSガイダンス ・職員訪問 ・年度活動振り返り	10
交流支援	・院生交流会打ち合わせ ・院生交流会 ・ランチ交流会	3
組織業務	・大掃除 ・物品管理 ・新人の部局配属 ・シフト作成 ・全体会担当決め ・メーリングリスト管理 ・名簿作成 ・マニュアル作成 ・コピー機購入	3
内部交流	・忘年会 ・送別会 ・スポーツ観戦 ・新人歓迎会 ・同窓会 ・自己紹介冊子の作成 ・アイスブレイク大会 ・前期打ち上げ ・スポーツ会 ・食事会	3
渉外活動	・合宿の外部参加者対応 ・セミナーの外部参加者対応 ・全国ピアサポーター集会 ・新任職員施設見学 ・副学長の訪問 ・他大学からの訪問	2
資料作成	・活動マニュアルの更新 ・部局マニュアルの更新 ・知恵袋の更新 ・発議内容の事前検討	0
外部向け セミナー	・コミュニケーションセミナー	0
美化活動	・園芸 ・手芸	0

があって楽しかった。内部交流を通して絆が強くなっている」、「学年関係なく交流を深めた」などの意見が挙げられた。次に、「組織業務」の達成度が高く評価された理由について、「会議の準備など確実に丁寧にもらえてありがたかった」、「全体会係やシフトの作成など、丁寧にみんなの意見を聞いて決めてもらっている」、「先輩と後輩と一緒に仕事をすることを通して、新人への教育ができた」という意見が挙げられた。さらに、「渉外活動」の達成度が高く評価された理由について、「今年是他大学の方が研修会へ参加されることを受け入れた。本学のPSR活動を外部に紹介できた」、「他大学のPSと交流することを通して、外部から客観的な視点を出て、活動意義を再確認できた」、「他大学の人とメールのやり取りをすることで、社会勉強ができた」という意見が挙げられた。

また、「研修活動」の達成度評価について、「実際の相談に役立つ研修ができた」、「疑問点が出てきた時に、研修を通して共有・解決できた」、「スタッフとして参加したとき、お互いに配慮しながら準備に取り組むことができた」、「前年度までの改善点をしっかり直すことができた」、「PSにアンケートを取って、ニーズに応じて研修会を開催することができた」などポジティブな評価が多かった。一方で、「忙しくて研修に全日程参加できない人が多かった」という問題点が指摘された。「運営企画」について、「無駄なく検討事項が整理されて、会議が長くなり過ぎないように配慮できた」、「役割分担がうまくできて、無理なく業務をこなすことができた」、「やった仕事についてちゃんとふり返ることができた」、「職員訪問を通して、大学がPSRに求めていることがわかったのが良かった」、「新入生相談の報告を通して、学

表2 活動カテゴリーの達成度評価（1～10の10件法）

活動	評価者															平均
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	
内部交流	10	9	8	7	7	9	10	10	8	8	10	9	9	7	10	8.73
組織業務	9	8	8	6	9	7	9	10	8	8	8	9	9	9	10	8.47
渉外活動	9	10	8	7	8	8	10	9	7	8	8	9	8	8	10	8.47
研修活動	9	9	8	6	10	10	7	7	9	9	7	8	8	7	9	8.20
運営企画	9	9	9	7	7	8	7	10	9	6	7	8	8	8	9	8.07
広報活動	9	9	6	6	8	7	9	8	8	8	9	8	8	7	10	8.00
相談活動	8	7	5	7	10	9	6	7	8	7	9	7	7	7	8	7.47
資料作成	8	8	6	4	7	8	9	9	6	6	8	7	8	7	8	7.27
交流支援	9	7	7	5	-	5	8	-	-	7	6	7	-	5	10	6.91
外部向けセミナー	7	7	5	5	-	4	7	-	-	8	3	7	-	-	7	6.00
美化活動	7	6	3	5	6	6	7	10	6	7	3	6	5	5	8	6.00

注：調査対象者が参加していない活動は「-」で表記した。

生たちがどんなことで困っているかについて大学に報告できた」など概ねポジティブな達成度評価が多かった。「広報活動」について、「授業訪問を通してPSRの宣伝ができた、新しい広報の仕方として確立できた」というポジティブな達成評価とともに、「ポスターがずっと同じだったので、更新が必要」、「Facebookの投稿をみんなで拡散して、全体で広報していく意識を持つ必要がある」などの課題と改善点が挙げられた。「相談活動」の達成度評価が比較的低かった理由について、「新人PSにとって、相談を受ける機会が少なかった」、「昼休みに相談を受けられるように体制作り工夫が必要だと思う」などの意見が挙げられて、今後の課題が浮き彫りになった。

「資料作成」、「交流支援」、「外部向けセミナー」、「美化活動」などの活動について、達成度評価が低かった理由として、「一部のPSのみ参加した活動で、参加していないPSが多い」という意見が挙げられた。新しい企画を遂行する際に、企画段階でスケジュールを確認し、役割分担などについても綿密な打ち合わせをすることが必要である。

IV. 考 察

1. PSR活動の実態について

今回の調査の結果から、相談活動のほかにも、PSRでは様々な活動が行われてきたことが明らかになった。「相談室型」の活動から、「新入生支援型」活動、「企画事業型」活動、「コミュニティ支援型」活動など多様な形態に発展している。例えば、自分たちの支援技術の向上をめざして自主的に行った「研修活動」、編入生や社会人学生を対象に行った「交流支援」、コミュニケーションが苦手な学生のための「外部向けセミナー」、PSRの活動を維持・充実させるために行った「広報活動」、「運営企画」、「組織業務」、「美化活動」、「資料作成」などの活動、PS同士の絆を深める「内部交流」、学内の関係部署や外部の教育機関と交流を図る「渉外活動」などの内容が含まれている。大学生に対する修学・研究へのサポートのみならず、心理社会的な側面の成長が得られやすいような場作りを積極的に行っている。PSRが主催した上記の活動は、大学生にとって参加への敷居が低いと、より援助が得られやすくなっている。

PSとの相談で自己解決に至らない場合でも、問題が深刻にならないうちに、当該大学生をキャリア相談、健康相談、学生相談、障害者支援の窓口につなげることができた。問題を早期に見つけ、早く支援を行うことによって大学生のメンタルヘルスの向上に貢献している。

2. 活動内容の重要度評価について

活動の重要度評価について、最も評価が高かったものは「相談活動」で、次いで「研修活動」、「広報活動」の順であった。同じ手続きで行った先行研究⁷⁾の結果では、「研修活動」が最も高く、その次は「運営での新たな取組・改善」、「相談活動」の順であった。A大学のPSRの活動報告書⁹⁾によると、過去一年間の相談件数は148件（利用者は190名）であった。相談内容として、「学内施設・資源案内」が65件で最も多かった。その次は、「履修・修学上の問題」46件、「対人関係の問題やメンタルの状態への懸念」17件であった。PSRの活動は17年目を迎え、公的な相談窓口と認識されるようになった。5年前と比べて、相談件数は倍近く増えただけでなく、相談内容も多様になってきた。特に「対人関係の問題やメンタルの状態への懸念」などの相談について、学生相談部署につなげる件数が増えてきた。先行研究⁷⁾の結果と比べて一層活動の基盤が堅固になり、活動が軌道に乗ってきた。PSの活動の重心は、「研修活動」から「相談活動」に移ってきたことが明らかになった。PSR活動の目標は「学生生活上の諸問題の対処方法について、気軽に相談し互いに助け合う学風を醸成すること」である⁴⁾。この点から、現在のPSR活動は、本来の使命に向かって実践を進めていると考えられる。

一方で、相談件数が増えてきて、特に「対人関係の問題やメンタルの状態への懸念」など難しい相談も増加しているため、PSの負担が大きくなっていることが懸念される。ピアサポートルームのミッションは、「来談する学生と一緒に抱えている問題の交通整理を行い、解決の糸口を探る」⁷⁾ことであり、この点から問題解決するために具体的支援を提供する学内外の専門的な相談窓口と一

線を画する。学生生活上の悩み事を聴いて、情報を整理した上で、適切な学内外の専門的な相談窓口に関する情報を提供し、学生本人の主体的な問題解決をサポートする。特に難しい問題を抱えた学生の場合は、PSRで抱え込まないように、専門的な相談窓口への援助要請を促すことが大切である。今後も、PSRと専門的な相談窓口の境目をより明確にし、多様な事例に有効かつ速やかな対応ができるように、学内外の資源との連携を強化していくことが課題として挙げられる。

相談活動の質を保証しているのは「研修活動」である。研修活動の目的は、相談者自身が問題解決することをサポートする対人援助スキルの習得である。現役のPSがトレーナーになって研修活動を企画・実施している。研修を受けてPSR活動に賛同してくれた大学生がPSに認定される。この養成システムはPSR活動を17年間支えてきたと同時に、対人援助の能力を身に付けた人材を数多く育てることができた。効果的な研修を行うために、現役のPSがお互いに相談しあって、知識や技法について主体的に吟味し、自ら教材を作成してきた。このような研修活動を通して、PS自身の企画運営と指導の力を身につけることできた。PSRで行ったセミナーの内容が広く知られ、現在その一部が教養教育の授業（「学生生活概論」）となって大学教育の一環として認められた。

周りの大学生にとって活用しやすい資源を目指すために、「広報活動」を行ってPSRの活動を宣伝してきた。過去の一年間では、今までの広報活動に加えて、授業訪問を行ってPSRの活動を宣伝した。また、現代の大学生の特徴に合わせて、ホームページやSNSなどのインターネット上のツールを通して広報を行うことを試みることで、より身近にある相談資源として認識されるようになった。

上記の活動以外にも、「運営企画」の重要度も高く評価された。運営面の立案と改善はほとんどPSが自発的に行ってきた。PSRの活動をよりよくするために知恵を出し合って新たな試みが行われている。基本的には個人の思いだけで動くのではなく、集団での意思決定を大切にしている。個

人からの提案は、PSR全体で話し合っ、計画的に実施される。その後振り返りを行って、今後のために経験を蓄積していく。このような一連のプロセスを通して、PSは主体性と責任感を身に付けて、社会生活力と人間関係形成能力が育成されている。

「相談活動」、「研修活動」、「広報活動」、「運営企画」がPSに最も重要度の高い活動として評価されたことから、これらの活動は、PSの成長との関連性が高く、活動を継続する動機につながっていると考えられる。今後もPSが質の高い体験を得られるように、さらに強化していくことが望ましい。

3. 活動内容の達成度評価について

達成度評価が高かったのは、「内部交流」、「組織業務」、「渉外活動」の順であった。「内部交流」とは、「新人歓迎会」、「忘年会」などの行事や、食事会やスポーツ観戦などの交流活動のことである。先行研究⁶⁾では、PSの活動を継続する動機として、「学び、ふれあい動機」、「居心地の良さ」などが挙げられた。PSRは学内ボランティア組織であるため、PS同士の良好な関係性が活動の基盤である。過去一年間では、良好な関係性を築くために、普段からPS同士の交流の場を積極的に作ることができた。また、対人援助に関する知識やスキルは、日常生活で周りの人との関係において実践されてはじめて力になって身についてくるため、内部交流はPSにとって、対人関係を形成する能力を向上する場にもなっている。「内部交流」を通して、メンバーの所属意識が高められ、組織力が維持されていると考えられる。

「組織業務」は、大掃除、物品管理、シフト作成など、相談活動と直接関係のない業務であるが、PSRの組織活動が円滑に行えるための基盤である。特に、過去一年間では、先輩と後輩がチームを組むことによって、長年の活動から蓄積された工夫が途切れることなく受け継がれて確実に定着している。

また、「渉外活動」を通して、他大学のPSとの交流ができた。客観的な視点を心得、自分たち

の活動の限界と今後の課題を認識することができた。外部の交流を通してPSの社会的な能力を磨く機会が得られて、教育的な効果が大きかった。

さらに、「資料作成」、「交流支援」、「外部向けセミナー」、「美化活動」などの達成度が低かったことから重要な課題が浮き彫りになった。現在、PSRでは、様々な活動が企画および実施されている。一方で、活動への参加は基本的に自由意志によるものであるため、個人によって参加内容と参加頻度にばらつきがある。活動内容と援助対象の範囲の拡大に伴って、一部のPSに役割が集中し、負担が過剰になっていることが懸念される。PSRの発展を考える際は、援助機能を高めると同時に、活動の主体であるPSの一人ひとりが参加を通して質の高い成長体験が得られることも重要なポイントである。このような理念を再認識し、原点に立ち戻って、持続可能で成長促進型のPSR活動を考えていく必要があることが示唆された。

4. 本研究の限界と課題

今回は主観的な体験について質的な研究手法でデータ収集し、分析を行ったが、PSの属性と他の関連要因との関連性について検討することは十分できなかった。PSの「体験」と「成長」を客観的に評価できる尺度を開発し、PSの体験を数量的に測定し、関連要因についてさらに検討していくことが今後の課題として挙げられる。

V. 結論

本研究では、A大学のPSRの過去一年間の活動を振り返り、PSにどのような体験が得られているのか、それら体験がどのように評価されているのかについて検討した。今回の結果から、A大学のPSRでは「相談室型」の活動から、「新入生支援型」活動、「企画事業型」活動、「コミュニティ支援型」活動まで、多様な形態で活動を行っていることが明らかになった。特に、大学生の相談支援を行う「相談活動」、自分たちの支援技術の向上をめざして自主的に行った「研修活動」、PSRの活動を維持・充実させるために行った「広

報活動」の重要性が高く評価されている。また、PS 同士の絆を深める「内部交流」、PSR の活動を維持・充実させるため行った「組織業務」、他大学のPS と交流を図る「渉外活動」などの内容の達成度が高く評価された。一方、学内外の資源との連携を強化するなど、PS にとって安全な活動体験を得られるような活動モデルを強化していくことが課題として挙げられた。

文 献

- 1) 杉村和美, 小倉正義, 加藤大樹, 他: ペア相談と学生の主体性を取り入れた大学でのピア・サポート活動 —名古屋大学における実践を通して—。青年心理学研究, 18: 51-62, 2006.
- 2) Horgan A, Sweeney J, Behan L, et al: Depressive symptoms, college adjustment and peer support among undergraduate nursing and midwifery students. J Adv Nurs, 72: 3081-92, 2016.
- 3) 日本学生支援機構: 「大学, 短期大学, 高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査」。2016.
- 4) 内野悌司: 広島大学ピア・サポート・ルームの初年度の活動に関する考察。学生相談研究, 23: 233-242, 2003.
- 5) 山下京子: 大学生におけるキャンパス・サポーター・システムの導入に関する実践的研究。学生相談研究25: 12-31, 2004.
- 6) 藤原美聡, 石田 弓, 兒玉憲一: 大学生のピア・サポーターにおける活動動機に関する調査研究。総合保健科学, 29: 25-34, 2013.
- 7) 内野悌司, 石田貴洋, 三浦寿秀, 栗田智未, 兒玉憲一: 広島大学ピア・サポート・ルームの活動評価についての考察—2011年度活動の Empowerment Evaluation。総合保健科学, 29: 13-23, 2013.
- 8) Fetterman D, Wandersman A: Empowerment evaluation principles in practice. The Guilford Press, New York, 2005.
- 9) 広島大学ピアサポートルーム: 平成28年度広島大学ピアサポートルーム活動報告書。2017.